

*World's
Famous
Classics*
62

メレディス

エゴイスト

George Meredith

THE EGOIST

*World's
Famous
Classics*
62

ナ全集

eredith
OIST

ス／朱牟田夏雄訳

イスト

Grimm

世界文学全集——62

メレディス

1980年9月10日第1刷発行

定価 960円

訳者 朱牟田夏雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社堅省堂



© KODANSHA 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-410621-2253(0) (翻)

目次

訳者はしがき

序の章	この一章、多少とも重要なのは最後のページだけか	九
第一章	小事件、メス使用への遺伝的適性を示す	一五
第二章	若き当主サー・ウイロビー	一八
第三章	コンスタンシア・ダラム	二三
第四章	リチシア・デイル	三一
第五章	クレアラ・ミドルトン	四四
第六章	彼の求愛	五四
第七章	婚約者	六四
第八章	怠け生徒との競走、先生との散歩	七八
第九章	クレアラとリチシアの対面、兩人の比較	八七
第十章	サー・ウイロビーが偶然のことから自身に称号を呈すること	九八
第十一章	八重の山ざくら	一六
第十二章	ミドルトン嬢とヴァーノン・ウィットフォード氏と	一九
第十三章	解放へのはじめの試み	三五

第十四章	サー・ウィロビーとリチシア	二四八
第十五章	放免嘆願	二五七
第十六章	クレアラとリチシア	二六九
第十七章	磁器の花瓶	二七九
第十八章	ド・クレイ中佐	二八七
第十九章	ド・クレイ中佐とクレアラ・ミドルトン	二九六
第二十章	古酒・名酒	三〇八
第二十一章	クレアラの黙想	三一九
第二十二章	遠乗り	三三三
第二十三章	短気と政略の組み合わせ	三四五
第二十四章	ウィロビーの寛容の一例を収める	三五七
第二十五章	荒天の逃亡	二七〇
第二十六章	ヴァーノンの追跡	二八六
第二十七章	駅にて	二九三
第二十八章	帰還	三〇三
第二十九章	サー・ウィロビーの敏感さを説く。同人、大いに教えら れる所あり	三二〇
第三十章	マウントスチュアート・ジェンキンソン夫人邸の晩餐会 を叙す	三三〇

第三十一章	サー・ウイロビーがお涙頂戴を試みて成功のこと……………	三三九
第三十二章	リチシア・デイルは精神的な、ミドルトン博士は肉体的な変化に氣付く……………	三五一
第三十三章	喜劇をつかさどるミューズが、二人の善人に目をつける……………	三六一
第三十四章	マウントスチュアート夫人とサー・ウイロビー……………	三六九
第三十五章	ミス・ミドルトンとマウントスチュアート夫人……………	三八三
第三十六章	午餐の卓での賑やかな会話……………	四〇〇
第三十七章	丁々発止の秘術を収め、その必要な理由をほのめかす……………	四一二
第三十八章	この章でわれらはエゴイズムの中心に一步近づく……………	四三三
第三十九章	エゴイズトの心中にわけ入る……………	四三八
第四十章	深夜、サー・ウイロビーとリチシア。クロスジェイ少年は掛蒲団の下にひそむ……………	四三六
第四十一章	ミドルトン博士とクレアラに、サー・ウイロビー……………	四四七
第四十二章	頭の廻転の早い男の洞察術を示す……………	四六三
第四十三章	本章、サー・ウイロビーが、自然界もみな申し合わせてわれに背くかと考えるに至る……………	四七七
第四十四章	ミドルトン博士、エリナー、イザベル両女史、それにデイル老……………	四九三

第四十五章 パタン両女史、デイル老、ブッシ、カルマー両夫人、さ

らにマウントスチュアート・ジェンキンソン夫人……………五〇三

第四十六章 サ―・ウイロビーが将才を発揮する一場……………五二

第四十七章 サ―・ウイロビーとその友ホレス・ド・クレイ……………五五

第四十八章 相愛の兩人……………五七

第四十九章 リチシアとサト・ウイロビー……………五八

第五十章 ここに幕はおりる……………五七

訳者注……………五三

解説・主要作品解題・年譜……………五八

写真提供……………PPS

写真撮影……………酒井健二郎

装幀……………アド・ファイブ

訳者はしき

訳者はこの作品『エゴイスト』の訳を、ほぼ二年前に岩波文庫から上下二巻で出版した（一九七八年五月上巻、同七月下巻、それぞれ初刊）。それは岩波書店との二十年來の約束によるものであったが、その訳業の進行中に、たまたまそのことを知らなかった講談社からも、本全集のために同じ作品を翻訳してほしい旨の交渉を受け、岩波側とも相談の上、まず岩波文庫で出版し、その刊行後一年を経たらば本全集でも出版する、という協定を結んだ。この版はその協定が実現したもので、「一年を経たらば」が二年以上になったのは、主として訳者の側の多忙あるいは怠慢のせいであった。

巻末の「解説」でもふれたように、メレディスの作品というのはその難解さの点ですこぶる有名である。それはわれわれのような異邦の読者にとってそうであるばかりでなく、本国の、しかも知識人あるいは文学の専門家たちにとってもそうのようで、一つだけ例証をあげる、有名な文学史家・批評家、エドモンド・ゴスもメレ

ディスを評して、「若い頃の彼は、光るだけでは満足せず、人を眩惑することを望んで、何をいうにも決して單純容易な言い方をせず、大変な努力をして常にこの上なく奇怪な言葉でものを書くという悪癖におちいった」と書いている。そしてこの「悪癖」は、決して彼の「若い頃」のことだけではないのである。

日本の作家や英文学者の中で、いちばんこの作家に親しんだのはおそらく漱石であろう。その初期の作『草枕』の中に、この作家のある作品の一節に自由訳を施して点綴した一コマがあるのは今では有名だが、他に、これも初期の作品『漾虚集』中の幾篇や『虞美人草』などの絢爛たる文章に、メレディスの強い影響があることも、今では広く認められている。たとえば『虞美人草』の「二」の冒頭、「紅」を弥生に包む昼たけなわなるに、春を抽んずる紫の濃き一点を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴たらしたるが如き女である」とはじまる、ヒロイン藤尾を初めて登場させる一節などがその好例である。あれは日本文だから、お互いはこれを何となくわかったような気持で読んでゆくが、これを一字一句吟味解説せよと言われたらとても一筋縄ではゆくまい。メレディスの文章も、時どき調子が出て来るとまずこれに類する英文になると思えばよい。言い換えればメレディスを邦訳しようと思ったらこの「紫の女」的日本文を駆使

できるだけの技術があればよいと思うのだが、それがそう簡単にはまいらぬから困るのである。

『エゴイスト』の訳は私以前に、大先達平田亮木訳が二種（一九一七—一八年版と一九二六—二七年の改訳再刊）と繁野天来訳（一九三八年刊）があり、さらに同じ天来の詳注版（一九三三年研究社）がある。両訳への批判めいたことは他にすでに書いたからくり返さないが、ともにまことに不満足な出来ばえなので、私はかねて新訳を試みたいと考えていた（ただし天来注は立派で、私もずいぶんお世話になった）。それが岩波版でともかくも結実したわけだが、さておまえさんの訳には満足できるのかと聞かれると、いささかギクリとせざるを得ない。前の両訳よりはよほどましのつもりだが（前のより悪かったらお話にならない！）、それ以上のことは自分では何とも言いようがない。

ただ今度の版でもお手上げに近いのは開巻早々の「序の章」で、これは前版にも記したように、難物中の難物、奇怪な比喩が続出してほとんど判じ物の感じである。今度の版では、本文にも全文に目を通してある程度の改訂を施したが、この「序の章」だけは思い切って訳し直す方針を立てた。それには同じ原文とばかりにらめっこをしていたのでは訳文の一新は不可能と考え、フランス訳を参考にすることにした。訳者はイヴ・オンヌ・

カンク（Yvonne Carque）という女性で、rpfの版、中村真一郎氏の好意でその所蔵本を拝借した。事情をご承知の方も多いと思うが、ヨーロッパ語同士の間の翻訳では（あるいは日本の作品の欧米語訳の場合でも）、外国物の邦訳の場合に比べると一般にはるかに自由訳の度合いが高い。日本の場合のように原文の一字一句に拘泥するのでなく、とにかく訳したものが「読める」文章になっていなければならぬと考えるからである。この「序の章」の場合の仏訳もそうであった。これをフランス語に堪能な若い某君を煩わして一応逐語訳に近く邦訳してもらった。同君の労には心から感謝している。あるいはその某君訳をそのまま（に近く）活字にすればよかったかも知れない。が、英原文と仏訳とその邦訳とを比較吟味しているうちに、仏訳に原文からの逸脱、むしろ誤訳が、あまりにも多いのを知った。結果は、英原文からの訳と仏訳からの訳との折衷のようなものになった。それがこの版の「序の章」で、これは一に私ひとりの責任、某君の知ったことではない。不徹底ながら一つの試みとしてこれを世におくる。

一九八〇年七月

訳者

エ
ゴ
イ
ス
ト

序の章 この一章、多少とも重要なのは 最後の一ページだけか

喜劇というのは、社交生活のあるいくつかの相を、われらのために明らかにしてくれる一種の遊びである。喜劇は、男であれ女であれその登場人物を、上流社会のサロンの中から選んで来る。表現の正確さを証明するために、粗野な証拠を持ち出すこともなければ、またわれらを信用させるために、やたらにこちらの官能をゆさぶることもしない。洗練された社会は、外界で行なわれる闘争、つまりわれらにとっては真実の証しともなるはずの埃や泥、品のない喧騒などは、まったく無縁である。それにまた、喜劇はわれらの疑ぐり深い態度に対抗するため、時計職人の眼鏡、どんなにこまかな証拠の粒をもその光の輪のなかにまざまざと浮かび上らせるあの虫眼鏡、あれの力を借りることもしない。「喜劇精神」は、たがいにきわめて明瞭な関係で結ばれた幾人かの人物を見さだめると、あとは一切の付属物を捨て去って、ただそれらの人物と、その人物たちの口にする對話とだけに関心を注ぐ。おのれも「精神」であるから、ひたす

ら人間のなかで精神に属するものを見いだすことのみに専念するのだ。喜劇精神の長所は、もっぱら突然の明察と熱意とにあり、われらを信じさせようなどとは夢にも考えない。ついて来るならやがてわかるという態度である。ついて行った上で何が得られるかは、おのずから別の問題である。

人類は、まことに浩瀚な一冊の書物、この世で一番分厚い書物を持っている。「世界の書」と呼んでもよいこの本は、すなわち「エゴイズムの書」であり、人類の叡智を満載した一書である。人間がものを書くことを知ったそもそものはじめから、次から次へとあらゆる世代が、それぞれに自分たちの一章を書き加えて行つたので、この書は日に日にそのかさを増して行き、思い切つて圧縮を加えない限り、そこからどんな利益を引き出すこともできない有様だ。

どこかでこの書物の蔭口を叩いている、さる高名なユーモア作家の声が聞こえるようだ。あれだけのページをこつこつと限なく旅して歩ける人間が一体いるものだろうか、とその声はたずねている。もしこれらのページを一枚ずつならべてゆけば、とかげ岬（ウイングランドの西南部にある岬の異名。その形からの名。）から出発して、たどり着く先は南極の果ての果て、探検家たちの言葉によればあまりの寒さに地面が爪立ち踊りを踊っており、事によると、

ちやうど犬が食卓の下の骨にありつくように、極点に近寄ることでもうやく息をつくとかいう、あのくたびれ果てた地域の、そのまた最後の切れはしまでも届くだろう。無秩序で単調な、くどくどと長たらしい叙述、いたずらな冗漫さは、読む者の心を衰弱させ、一瞬のうちに老け込ませる、というのだ。が、今度は当方が、どこかの章で、この孤独でかつ威厳にみちた異国人の偏狭な頭脳を描写してみてもどんなものだろう。努力次第では、その書物の中に、当方を批判したこの人物にふさわしい個所を見いだすこともできよう。さてそうなった時、一体何が明らかになるのか？ ずらりと一列にならんだけページの末端が、みなさんご承知のあのドーヴァーの絶壁からむこうに垂れていた頃にわかつていたこと以上に、何ひとつふえはしないのだ。そしてその絶壁にこそは、かのユーモア作家、われらの偉大な先達の巨匠が鎮座して、目の前にひろがるいくつもの大洋が、心の中の内なる大洋に反映するさまを、つくづくと眺めておられるのだ。

言葉を換えて申せば（御免を蒙って翻訳をさせて頂くのは、ユーモア屋というのは難解きわまるものであり、読者を煙にまくことをしばしば義務と心得てさえるからである）、かの書物のページは、ほとんど極地に達せんとする果てしもない距離をおおってもいるだろう、だ

がわれわれは内なる鏡を、つまり完全でしかも縮小された映像を送り返してくれる精神というものを、用いようということになる。されば、右の書物の精髓だけを抽出して、われわれに適した実例だけを拾い出そう、というわけだ。写実派は目に見えるあらゆる光景を描写し、耳に聞こえるあらゆる騒音を書き記したが。思うにわがユーモア作家が写実の小説を非難する理由は、それが魂を枯渇させ、われわれのまわりに巨大でかつ騒がしい世界を作り出す、そしてその世界では、まるで激んだ沼沢地から瘴気が立ちのぼるように、われらの現代病ともいうべき「画一病」が吐き散らされている、という点にある。その療法なり病源なりが何であろうと、われわれがこの病気にかかっていることは確かである。さる日われらは多勢一団となつて、その解毒剤を求めて「科学」のもとに押し寄せたが、そのさまはちやうど疲れ切った歩行者たちが、全速力で突走る列車の機関車に藪から棒に立ち向かうのにも似ていた。科学がわれらに紹介してくれたのは、少々髪が白くなり過ぎたご先祖たちで、この人たちは東洋風の姿勢をとつたまま、動かなくなっていた。そこでみなは、夜が近づいたアマゾンの森の物音にも負けぬほどの原始的な言葉でものを言おうと努力した。病気はもうなおったものと思ひ込んでいたのだ。ところが夜明け前に同じ病気がぶり返し、おまけにわれわ

れには尻尾までが生えていた。前からも後からもその尻尾は見えるのだ。つまり前と変らぬ姿のままで、しかも動物になり下ってしまった。「科学」がしてくれたことと言つてはそれだけであつた。

われわれをなおしてくれる力は「芸術」にしかない。ほとんど何ひとつ教えてくれそうもない猿どもは、見放すことにしよう。まず何よりも、われわれの共有のあの叡智の書を読み解くために、「芸術」がどういう形でもっとも有効な援助をもたらしてくれるのかを、学ぼうではないか。そうすればわれわれは、より明晰な理解をもつて、より活潑で生き生きとした足どりで、警戒の霧笛の鳴りひびく国を離れて、光と歌との中に脱れ出て来ることができるよう。

一体われわれは、無限に小さなものを光の輪の中に浮かび上らせるあの時計職人の虫眼鏡を用いて読むことにしたものか、それとも——ちやうどアルプスのてつぺんから地平線を見おろす時のように——われわれのあらゆる社交知から生まれたあの精神、つまりは「喜劇精神」が、空の高みから見分ける実例やら類型やらだけを選び出すことにしたものか？ 賢者たちは後者をよしとしている。その人たちによれば、この書の全体にわたつて、過度の資料を蓄積する傾向があり、このような過密状態は、この書が人類に対してさしむける鏡を曇らせて、わ

れわれ個人個人が自分の有りようをそこに認める妨げとなる。これは文明にとつて危険だというのだ。そこでこの賢者たちの力説するのは、煎じつめればわれら自身の生みの子であるかの「喜劇精神」を督励して、この書の量を削減させよ、ということになる。彼らによれば、喜劇の中にこそ真の気晴らしが見いだされるし、また、かの偉大な書物を解く鍵ともなり、かの書を引きしめる音楽を提供するのも、またこの喜劇である。あの書のまるまる何章にもわたる文章をただの一句に凝縮し、幾冊もの本をただ一人の登場人物に圧縮するのが喜劇であり、さればこそ、何万マイルにも及ぼうというページ数の書物のかんりの部分を、ただ一回の喜劇の上演に要約できるのである。

それというのもまことに、この賢者たちによれば、われらは人間の名に値したいと欲するならば、何としてもこの書のできる限りの部分を、すくなくとも今われらの眼前に開かれてある一ページだけは、読まないわけにはゆかぬからだ。これら賢者の一人は、この書の上に人さし指を突き立てつつ、そのたいへんな熱意に免じてゆるされるべき大げさな言葉で述べている。いわく、ここにこそ君たちのおさるべき悩みの対症薬がある。「喜劇」がそれを蒸溜してくれるのだ。「科学」にも、また「速度」にさえも、たよつてはならない。——「速度」など

は貪欲の別名にすぎないのだ。だが生きるためには、軽やかな魂をおのれのうちに感ずるためには、どきどきと打ちつづける脈搏の鼓動に多少の変化を加えてやる必要がある。ところがその脈搏のほうを調べてみると、これが老いたやくぎ馬の節くれだった脚みたいにノソノソと進むか、それとも埃と格闘しながら絨毯を叩く男たちの使う棍棒のように、あるいはまた家の中で、真夜中を過ぎてから生まれる時刻に簡単な算術を教えてやる大時計の振子のように、のろろとしか進まない有様だ。酒神バッカスがちよつかいを出してみても、格別の効き目はない。さればといってわれらの脈搏を疾駆させてみても——バッカス神を背にのせて、結婚の神ハイメンのもとに、あるいは冥府の王のもとへと疾駆させてみても、いつも同じ搏ち方でしか鼓動しない。われわれは、まるで大海原を統べる女神に抱きすくめられたように、途方もない単調さにしつこくまつわりつかれているのだ。関の声が聞こえて来る。転換を求めて、さあ出発だ！ みんなが叫んでいる、速く読み、理解することを可能にしてくれるのは「喜劇」なのだ、と。尊大と、慢心と、不機嫌と、また、われらの間にくすぶっている粗野と雑駁との痕跡、それらを正そうと提議するのが「喜劇」の女神なのだ。この女神はまた至高の教化者であり、われらの品性を磨き上げ、おいしい御馳走も用意してくれる。

たとえ棒の鞭を手に、センチメンタリズムに監視の目を光らせているにしても、この女神、感情を敵視はしない、とその賢者はいう。誠実である限りは恋をするもよい、熱烈に恋をするもよい。たゞ、理性に逆らうのはよくない。恋する者が気取りすぎた足を一步でも余分に踏み出せば、その一步踏み出した足が喜劇のわなにかかつてしまっだろう。しかし「喜劇」には、卒直な笑いの作用を受けて、軽蔑から慈愛が生まれるというふしぎな場面が見られる。言ってみればプロスペロの霊杖によって、呪われた妖婆シコラスの呪縛から解放されたエアリエルだ。そして、くつろいだ理性のこういう笑いが、ちやうど夏の到来を告げる移り気な春の、魔法にも似たそよ風のように、百花斉放をもたらす。その笑いがかの靈妙な妖精に、自由を与える声が聞こえるではないか。これに反して、このような酵母を持たぬ社会をじつくり観察して、比較して見るがよい。こちらでは、乳しぼりの時間が過ぎたあとで、乳房を一杯に膨らませた牝牛の唸り声が聞こえるばかりである。だれか權威ある聖職者が、こういう不浄の連中に破門の一喝を食らわさせてくれないものか。この聖職者は事によると熱狂家だったかも知れないが、彼が群衆の騒音に耳を傾けてくれたらと思うのである。

ところで「哀感」^{ペイソス}について一言すれば、今の世ではど

んな船も、これを積み込まずには船出できないし、またわれらとても、「哀感」をまったく欠いているわけではない。それが厳密にはどういふものから成っているのか、余は知らない。それはひよつとして、今日ではわれわれの船上で見る見る水分に変わってしまうこともあり得る底荷なのだろうか。まさか積荷ということはあるまいし、また積み込んだ真水のほうは別の用途がきまっているからだ。しかもこの底荷をずしりと積み込んだ船ほど、海面にあつて姿勢をより垂直に保つように見える——ここにも一抹の哀感があるわけだが。ところで、

「エゴイスト」も疑いなく憐憫の情をよび起こす。すべての者の犠牲において自分だけは美服をまといたいと願う者、そして、その欲求のゆえに逆に素っ裸の生身をさらす羽目に陥る者、もし哀感が何かの形をとることがあるとすれば、そういうエゴイストこそ哀感を具現化した人間と考えてよからう。ただこういう男が、諸君に襲いかかつてやにわに投げとばし、ぎゅうぎゅう締めつけてむりやり塩辛い涙をしぼり出すことは、ゆるされてない。そこに新味があるのだ。

この男が、今の世のわが国の、富と名譽とをあり余るほどに具えた紳士であることは、今すぐご承知願つておいてよろしかろう。どう手を加えてみても、柔軟さなどは微塵もない人物である。この男の滑稽味は、表面には

まずさざ波一つ起こさせないから、それに気づき得るのは、すこぶる目が鋭くてすこぶる悪戯いたづらつ氣の多い小鬼どもだけであり、この手合いのけたたましい哄笑が、普通の人にはとんと知覚できぬほどのこの男の本性の動きを増幅して見せるために、おとなしい文学の天使がたまはじめてこの男の滑稽さに気づいてしまったという始末である。実はこの天使がた、ただ一人の例外もなく、世上の言い伝えをそのまま信用して、わが「エゴイスト」をごく控え目に（こういう場合には簡潔さが最高のお世辞にちがいないが）、やれ良家の出で大変な資産を持つ紳士だの、やれ具体的利得を大いに尊ぶ立派な国の偶像的存在だのと、まさに書きつけようとしていた矢先だったのである。

小鬼どもはいたずらっぽい意地悪さの持主で、その目を一段と光らせつつ、押し出しの立派な人物にひそむ滑稽さを暴くことに、性の悪い喜びを感じる。どこかにエゴイズムに気づくと、それがどこであろうとこの手合いはその場に天幕を張って、田陣を作つてうずくまり、角燈に火をともし、滑稽な出来事の出現を自信満々のさまで待ちかまえる。その自信たるや大変なもので、これこそ自分らの獲物と見込んだ紳士が見つかると、その犠牲者が知らず知らず、ついうっかりと跳ねまわったりおどけたしぐさを始めるまでは、絶対に監視の目をゆるめ

ない。やがてこの犠牲者は、原始的な衝動に身をゆだねることになり、連中にとってはそれが獵の合図、あつという間にエゴイストを追う小鬼どもの追跡開始で、両方とも姿を消してしまふ。周知のとおりこの手合いは、幾百年にもわたつて一つの名家の様子をうかがっていることもある。つぎつぎと生まれる新しい跡取り息子の誕生にすべて立会つて、待機を証拠立てるために熱心にノートをとつておき、やがて時になると、手に手を取り合つてその名家のぐらつく大黒柱のまわりで、この手合い独特の陽気な輪舞に合わせてコーラスをはじめなのだ。それはまるでこの手合いがとうの昔から、まだ生まれもせず懐胎さえされていなかったその家産の相続人に、エゴイズムの呪われた巨像を嗅ぎつけていたかのようなのである（あるいは真実嗅ぎつけていたのかも知れない）。しかもそのエゴイズムが勇敢であり謹厳である間は、また社会や国の役に立っている間は、この手合いは忍び笑いをもらすのさへ憚かる。時機の到来を待つのである。

その昔、この名家を打ち建てたのは、一人の壮大な老エゴイストだった。そしてこの家系を維持してゆくには、つぎつぎとより洗練された質をそなえたエゴイズムが必要なのは明らかであるが、それにもまさつて特に明らかなのは、表面だけをとりつくろいつつその実は原初の粗野なエゴイズムに逆戻りしたりすれば、どれほど

物腰を上品にしてみたところで、その名家を根柢からゆすぶるは必定、という一点であろう。そういう時代錯誤の亡霊を生み出すくらいなら、「エゴイズム」がおのれの性格改造などに同意せずに、意固地に何もかも父祖の遺風を固執したほうがよかつたのだ。とはいへこの男の姿を目前にしては、円陣を作つてうずくまっていた小鬼どもにすれば、自滅の喜劇の開幕を今やおそしと、大いそぎで目を伏せたり、耳をいっぱい押し開いたり、とても尻を落ちつけてなどおられないのである。

おのれを愛せしばかりにおのれを滅ぼせり
もしこの一句がまだわれらの文学に存在しないならば、
これをこのエゴイストの墓碑銘としよう。